

# 白選五十一首



## 小島ゆかり

こじま・ゆかり 1956年、愛知県生まれ。早稲田大学第一文学部卒。78年、大学在学中に「コスモス」入会、宮柊二に師事する。歌集に、『水陽炎』『月光公園』『ヘブライ暦』『獅子座流星群』『希望』がある。平成11～12年度に「NHK歌壇」の司会を担当した。

風中に待つとき樹より淋しくて蓑虫にでもなつてしまはう

まだ暗き暁まへをあさがほはしづかに紺の泉を展く

ひとり来て川を覗けば尾のごとくしづかに垂れてわが冬の影

杳い杳いかのゆふぐれのにほひしてもう似合はない葦色のスカートとほ

秋晴れに子を負ふのみのみづからをふと笑ふそして心底しんぞこわらふ

消灯の窓々ふかし星ぎしぎしいのちぎしぎしあたたかき夜ぞ

夜のたたみ月明りして二人子はほのじろき舌見せ合ひ遊ぶ

団栗はまあるい実だよ櫛の実は帽子があるよ大事なことだよ

もくれんのわらわら白いゆふぐれは耳も目鼻も落としてしまふ

子供とは球体ならんストローを吸ふときしんと寄り目となりぬ

おほぞらに鉄を入れし者ありやこよひ半弧の月鮮しき

〔水陽炎〕

〔月光公園〕

〔ヘブライ暦〕

待つわたし、覗くわたし、落とすわたし。  
笑うわたし、食べるわたし、夢をみるわたし。  
抱くわたし、殴るわたし、妬むわたし。

いろいろなわたしがいる。わたしにはわたしが見えないが、歌の中にいるわたしは、涙ぐましくさびしい。

一方で、わたしをめぐるものたちはみな、なんて不思議で懐かしいのだろう。

帽子をかぶった木の実、青桔梗の呼び声、  
あやめの女。ぼーむと鳴く白鳥、つるむ田螺、  
いぼいぼの蝦蟇。それから、肉桂水の瓶や白  
いごはん、月夜に芽吹きたまねぎや林檎の中  
の鐘の音。それからそれから、雨の日の眼鏡  
店やエトピリカの切手。

しかし、それらに近づこうとすると、まし

覚めぎはに忘れし暁の夢ありてひと日覗きぬ見えざる壺を

子をもたぬ阿呆、子をもつ大阿呆　はるは菜種の黄の花ざかり

新しきインクをおろす風の朝　青桔梗あをききやうと声す

「発音より声が変わだよ」"Hello, Hello, " 声はふつうに出せばいいんだよ」

蔑されてわれ鮮しき　捨てにゆくパインの缶の口のギザギザ

アメリカで聴くジョン・レノン海のごとし民族はさびしい船である

頭の上に黒満月を載せてゐるユダヤびとらと昼の食事す

死を囲むやうにランプの火を囲みへブライ暦は秋にはじまる

かならず日本に死なずともよし絵葉書のランプに今宵わが火を入れぬ

青日傘さして白昼の苑にゐるし女あやめとなりて出で来ず

ありてなき合飲のくれなる　ちちははの夢ひとつづつわれが消したり

片頬笑み子は差し出せりあかねさす出席簿ぬばたまの通信簿

白鳥の身に純白のみづ実りぼーむと鳴けり雪ふる朝

傘雨忌の青葉のあめは眼鏡店のめがねを濡らすことなく過ぎぬ

川原に蜻蛉きらりきらりるて思ひのほかの人生のこと

鐘りんごん林檎ぎんごん霜の夜は林檎のなかに鐘が鳴るなり

生命がまだ音楽でありし世の水中ホルンあうむ貝恋ふ

そんなにいい子でなくていいからそのままいいからおまへのままがいいから

銀河ぐらりと傾く霜夜うめぼしの中に一個のしんじつがある  
月ひと夜ふた夜満ちつつ厨房にむりッむりッとたまねぎ芽吹く

「獅子座流星群」

て言葉にしようとする、それらは少しずつ汚れ、いびつになる。

春ひと日われは穢せり水仙の清きを眼もて子らを情もて

第二歌集「月光公園」に収録したこの歌は、春の明るさの中でやって来た、そんな汚しの感覚を歌った一首である。が、それは決してわたしという個人を卑しむ心ではない。存在そのものに関わる畏れの感情である。

一人で生まれてきて一人で死ぬ人間はやはり、孤独なのだと思ふ。表層の孤独は、愛情や悦びによつて慰藉される時間をもつが、深層の孤独は、絶えることなく、生きる刻々を連続している。

理由もなくやって来るかなしみや、脈絡もなくやって来る感傷、あるいはまた、内臓の闇が抱える温かさや、感覚や官能のときめきの深さ。深層の孤独はつねに、プラスとマイナスのエネルギーを秘めて、ときに私の内側から突出してくる。

存在そのものに関わる、純粹で畏れに満ちた、しかも深く温かい、そんな深層の孤独から歌いたい。

「希望」

抱くこともうなくなりし少女子を日にいくたびか眼差しに抱く

二重險にあくがれわれを責めやまぬ娘らよ眼は見るためにある

温水の田螺おそるべし藻を食みてじつと交みてぞくぞくと殖ゆ

大鍋に湯はゆらぎつつ通夜の夜を歓喜くわんぎとたぎちくる奇し

上階に深夜のわらひ ひとたびは大笑ひするイエスを見たし

さうぢやない 心に叫び中年の体重をかけて子の頬打てり

希望ありかつては虹を待つ空にいまはその虹消えたる空に

攻守ふいに入れ替はるときバスケットコートに夏の炭酸水湧く

なめこ汁どろりとすすり霧の夜のふかいふかあい暗愚のこころ

肉桂水の瓶を吸ふときいちだんと頭でつかちなりしや隆吉

ひとところ空気ゆらめき黄金の遊びしてゐる連翹と蜂

「希望」以後

あざらしのやうに湿つた夜が来る ぼおむ、しゅつしゅつ また雨季が来る

中年ばかりで遊ぶ青葉の大公園あうれしくてブランコに乗る

早春のなほはるかなる未知として方程式のXとY

終ります白梅散りて 終ります紅梅散りて いつか終ります

いぼいぼの褌に一度はなつてみん 妬む疑ふ憎むいぼいぼ

亡き舅も病む父もかつて憤り白いごはんを食べてゐました

雪の夜はいつさい紺の世界にてシャガールシャガール雪の音する

エトピリカの切手を貼ればまだ書かぬ葉書は北のエトピリカ宛て